

君からの、
お前からの

あずま渡里



君からの、お前からの

あずま渡里

君からの お前からの

……もう、こんな世界は真つ平だ。

雨の中、武道は傘もささず、俯いてブツブツと呟きながら歩いていた。

そんな彼を、ある者は遠巻きに眺めて、見下したように嘲笑い。またある者は疎ましげに一瞥し、目を背けた。それらから逃げるように、武道は人気のない路地裏へと歩いて行った。

早くに両親を亡くした武道はずっと周囲から馬鹿にされ、蔑まれてきた——自分が一体、何をした？ ただ真面目に生きて、働いてきたじゃないか。

『ああ。お前は、なんにも悪くないよ』

そんな声が聞こえた気がして、武道は弾かれたように顔を上げた。

……雨ではなく、涙で濡れた青い瞳の、その先。

ショーウインドウの向こう側では綺麗な金髪を三つ編みにし、瞳と同じ綺麗な紫のチャイナ服に身を包んだ、綺麗な綺麗な男の子が微笑んでいた。

※

「ブランドールって、聞いたことはなかったか？」

「いや……ああ、えつと……そう言えば、聞いた気も……あ、ありがとう」

黒髪と、顔に傷。武道と同じ年くらい——二十五、六歳くらいだと思うが、赤いチャイナ服や左右色違いの目

の色も相まって、迫力のある美形だと思った。

そんな彼が、ずぶ濡れの武道を店の中に入れてくれ、タオルを貸してくれただけではなく温かいお茶まで淹れてくれた。

「……ありがとう。すごく、美味しかった」

「もう一杯飲むか？」

「いや……解るよね？ 俺は、このお店のお客さんになれるようなお金持ちじゃない……中に入れて貰って、お茶を飲ませてくれただけで感謝してるよ」

そこで一旦、言葉を切って武道は店の中に入ったことで、間近で見ることが出来た先程の少年——十歳くらいのプラントドールに、我知らず微笑みながら話の先を続けた。

「それにあの子を、傍で見られたからね」

「気に入ったか？」

「ああ……何て、綺麗なんだろう……昔、施設のあった教会で見た絵の、天使に似てる……俺は、その天使に触れられたら、きつと天使になれるって……」

歌うような、夢見るような。武道の眩きが、不意に途切れる。

……プラントドールが、武道に近付いてきたかと思うと、その手で武道の右頬に触れたからだ。

「うわあっ!? うご、動いた!? 何これっ!? 仕掛け、どうなっ……あつたかいし、無茶苦茶笑ってる!? どうなってるん!?」

プラントドールという単語は聞いたことがあったが、すまして微笑んでいるのを見て『人間サイズの人形』だ

と思っていた。だから、動いて触られた——だけではなく、にこにこ笑いながら武道の膝に乗り、ぎゅーっと抱き着いてくるプランツドールに、武道はパニックを起こした。

一方、店の店主らしい男はそんな武道達を見て言った。

「……まいったな」

「へ？」

「蘭……その子の名前だ。蘭は、お前を気に入ってしまったらしい……お前に、付いていきたがつてるみたいだ」
「でも俺、極貧だよっ!? それにつ……」

「……それに？」

「とにかく……買えやしないよ、俺は……明日の食事にも、困ってるんだ。仕事だって、クビになったばかりで……」
「困ったな……プランツドールって言うのは、我儘でな。気に入った客がいると、他の客には目も向けなくなるんだ」

「へ……え？」

「つまりそいつは、お前がこの値段で買い取らないとどこへも売れない品物になった訳だ」

「げっ!？」

「エサは一日三回。ミルクを与えるだけ。週に一度の砂糖菓子。それだけなんだが……これに被服費、基礎化粧品、入浴剤……」

状況についていけず、あいづちを打つだけになった武道の前で、男はどこからともなく取り出した筆で、サラッと色紙に馬鹿高い値段を書いていった。たまらず声を上げ、絶句した武道の前で男は更に値段を追加していく。

「……困ったな」

「そんなこと言われたって、どうすれば!？」

「ああ……そう言えば昔のことだが、プランツが攫われたことがあるんだ」

「へ？」

「勿論、人形だから誘拐なんかにはならないが……何しろ、こんな値段だからな。それから、保険に入ったんだ」

「本当に、困ったことに……プランツが客を気に入ってさえいれば、むしろ喜んでついていくから……ああ、つまらない話を聞かせて悪かったな。蘭のミルクの時間なんだが、任せていいか？」

「え？」

「あつちの戸棚に入ってるし、粉末もある。あ、俺は奥で調べものがあるから失礼する……よければ、蘭の着せ替えでもして遊んでくれ。あつちの扉の向こうには下着や靴、あと他の服も揃ってるからな」

「……………」

わざと武道に聞かせるように言って部屋を後にする男に、武道は呆然としそんな彼にくつついている蘭はひらひら手を振って送り出した。

(え、これって……盗めって、言われてる!?)

確かに、武道に蘭を買うような金はない。しかし、いくら誘拐にはならないとは言え、こんな高価な人形を盗んだら死刑になる。しかし、買えるような金なんて武道には。

……蒼白になり、ぐるぐると自問自答していた武道の顔を、蘭が覗き込んできた。

瞬間、武道は目を、心を奪われて——引き込まれるように、蘭の頬に触れて言った。

「俺のアパートには、連れていけない……君みたいな綺麗な人形がいるって解ったら、すぐ怪しまれて噂になる……君を、盗られたくない。どこか、遠い場所に行こうか？」

プランツドールは基本、話さないとされている。

けれど、いやだからこそ蘭はそんな武道の手に自分の手を重ね、しつかり頷いて笑みを深めた。それにつられて頬を緩めると、武道は暗く沈んでいた青い瞳をキラキラと輝かせ、一筋二筋と涙を流しながら、祈るように誓うように言葉を続けた。

「ああ、そうだ……何だつて、やるよ。とにかく、君を養う為にさ……だつて君は、俺を初めて必要としてくれたんだ……」

※

「ただいまー」

「あ？ ……ああ、お帰り」

「ちえつ、驚かないのかよー。鶴蝶は、ノリ悪いなー？」

半年後、春から秋に変わった頃。

店にやって来たのは、武道——ではなく、黒と金の混じった長い三つ編みを揺らした、十八歳くらいのラフな服すらモデルみたいに着こなす、美しい青年で。

そんな青年に、オツドアイの店主はさらりと答えた。それに口ではつまらなそうに言いながらも、口の端を上げて青年は小さな布袋を鶴蝶と呼んだ店主に放り投げた。

「高値で買ってくれるところ、知らねー？ あ、紹介料は『俺』の値段と一緒に、売値から払うからよー？」

咄嗟に受け取った店主は、その中身——武道の瞳のような、綺麗な青い石の数々を見て感心したように青年を

見た。

……極上のプランツドールを極上の環境で慈しみ育んだ時、その愛の証としてプランツの瞳から零れ落ちた涙は、結晶となり『天国の涙』と呼ばれる宝石になる。そう、今、鶴蝶が手にしているもののように。

「確かにこれなら、一粒だけでも人形本体以上の価値があるが……それにしてもプランツドールが、自分を買取りに来るなんて驚きだな、蘭？」

※

あの後、武道は蘭を連れて山の中の小さな村へと向かった。

それから村役場で仕事を紹介され、農作業や雑用を手伝い、その金のほとんどを蘭の為のミルクや砂糖菓子、それから蘭のローンへと回した。

そう、結局武道は蘭を盗むのではなく、ローンを組んでコツコツ支払うことを選んだのだ。ちなみに遠い村へ行ったのは蘭を盗まれない為と、格安の古民家に住むことで家賃を節約する為である。

……しかし日を追うごとに武道は弱っていき、やがて蘭の面倒を見る時以外は寝込むようになってしまった。

「ごめん、ね。蘭君……君と会った日、俺、病気が見つかって……余命宣告、されてさ？」

初めて会った時から、四か月ほど経っていた。

ひどく痩せた手で、それでも枕元から離れない蘭の頬を武道は撫でてくれた。その手に蘭が頬ずりすると、武道は同じように痩せた頬を、けれど微笑みに緩めてくれた。

「身寄りがなくて、仕事もクビになって……だけど、蘭君に会えて。俺ばかり、幸せになってごめんね？ 足りないけど、俺の遺産は店に支払うようになってるし……村長さんにも、頼んでるから。俺が死んだらすぐ、店長さんが迎えに来るからね」

「……っ！」

謝って、悲しいことばかり言う武道に、蘭がふるふると首を横に振る。

そんなささやかな刺激にも耐えられなかったのか、パタリ、と武道の手が布団に落ちた。そして、一気に脱力したように目を閉じ、涙を流しながら声にならない声で「らん、くん」と呟くと——咳と共に血が吐き出され、更に武道の顔色が悪くなった。

そんな、死んでいこうとする武道を見る蘭の瞳から、涙が——いや、武道の瞳と同じ青い石がぼろぼろと零れ落ちる。

だがその涙を拭わないまま、蘭は武道の呟きや血や吐息など、彼の全てを奪うように唇を塞いだ。その口づけは、逝きかけていた武道の目を再び開かせるくらい深く、激しかった。

しかし次の瞬間、武道の目が更に大きく見開かれる。

……まるで、魔法のように。

一気に十八歳くらいにまで成長した蘭は、きつくなった服を脱ぎ捨てて、武道の血で赤く染まった唇を、見せつけるように舐めてみせた。

そんな蘭を見て、武道は嘩然とし——次いで、今まで死にかけていたとは思えないくらいの大声で絶叫した。

「ミルクと砂糖菓子以外は、口にさせないってこういうこと!? 美人薄命って言うけど、俺の血のせいでますま

す美人さんになって枯れちゃうなんてやだよ、蘭君っ！」

※

「本当に、武道はバ可愛くてなー」

「……惚気か？」

呆れた鶴蝶の声をさらりと無視して、蘭は話の先を続けた。

「プランツが甘美な憂鬱を知ると、大人になるだろう？ 単純に血じゃなくて、あいつの悲しさとか悔しさとか……あと、絶望とかそもそも病気とか？ そんなのを、俺が喰らったからだろうな。おかげで武道、すっかり健康体に戻ったわ。ま、お前と大将見てたから勝算はあったけどよ」

「持ち主とプランツの相性が良いなら十分、ありえるからな。だがそれなら何故、お前が『天国の涙』を売りに来たんだ？」

「あいつだと、やつすく買い叩かれるのがオチだし……俺以外のプランツに、万が一でも目をつけられたらたまんねーからな」

「そうだな」

蘭の言葉を、鶴蝶は否定しなかった。癖のある黒髪に、ダサイ服。青い目こそ人目を惹くが一見、平凡に見える武道は『全プランツドールに愛される存在』だったからだ。

この界限では『波長が合う』と言われるが、武道のようにどんな気難しいプランツドールにも無条件で好かれる者は、珍しいが確かに存在する。条件は『どんなプランツドールからの愛情でも、同等以上に受け留めて返せる』のだが、愛情を糧にするプランツドールからの愛情は極上になればなる程、深く激しく果てしない。そん

な激重な愛情に応えられる者は滅多にいないし、だからこそどんなプランツドルからも無条件に愛される存在なのである。

「あいつはこうなつた俺でも、天使だつて言うけど……あいつこそ天使だし、流す涙は天国の涙以上に価値があるんだよ。ま、笑つてる顔のが好きだし、そもそも俺以外には泣かせねえけど？ 目下の目標はまだ俺のが年下に見えるから、もつとあいつの色々を喰らつて育つことだな！」

それ故、気難しいプランツドル幹部レベル（筆頭はいザナ）な蘭が目を覚まし、猛アピールの末にこうして溺愛している訳で。

「……良い宝石商を、紹介してやる」

独占欲丸出しの台詞を樂しげに口にする蘭に、鶴蝶はやれやれと言うようにため息をつき、これ以上惚気を聞かされない為客の一人を売ることにしたのだった。

君からの、お前からの

発行日 2022年8月12日

著者 あずま渡里

<https://www.pixiv.net/member.php?id=3229042>

連絡先 contact@rainbow.sakura.ne.jp

印刷 シメケンプリント

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。
